翻訳　レッシングの喜劇『ユダヤ人』

Eine Übersetzung von Lessings Lustspiel: „Die Juden“

栗花落（つゆ）　和　彦

『ユダヤ人』
一幕の喜劇　1749年完稿

登場人物

ミッヒェル・シュティッヒ
マルティーン・クルム
旅人
クリストフ　その従者
男爵
若い令嬢　その娘
リゼッテ

第一場

ミッヒェル・シュティッヒ，マルティーン・クルム

マルティーン・クルム　おめえは阿呆だ，ミッヒェル・シュティッヒ！
ミッヒェル・シュティッヒ　てめえが阿呆なんだ，　マルティーン・クルム！
マルティーン・クルム　まあまあ，揃いも揃ってとんでもねえ阿呆だった，ってことだけは白状しようじゃねえか。あんな奴のことなんか目じゃなかったんだから，あれ以上やりゃ叩っ殺しちまったとこだぞ！
ミッヒェル・シュティッヒ　てめえはどうかしてるぜ。どうやりゃあれ以上抜け目なくことを始められたって言うんだ。俺たちの変装がうまくなかったっ

てのか。御者が味方につかなかったってのか。運が仇してあんな横槍を入れたのは，なんか俺たちのせいだったってのか。だってよ，俺は何百回も言ったぞ。途轍もねえ運！　こいつがなきゃあ，ちゃんとした悪党にすらなれっこねえ，ってな。

マルティーン・クルム　うーん，でもなあ，よくよく考えてみりゃ，俺たちの首は辛うじてそのお陰で二，三日は長くお縄から逃れたってわけよ。

ミッヒェル・シュティッヒ　ははん，運って奴はお縄とつながりがあるんだ。泥棒が皆吊されでもすりゃ，絞首台は今以上に立て込んじまう羽目になるってわけだ。今じゃ辛うじて二マイルにひとつが目に見えるくれえだからな。それに，あるにしたって，目にしたところでなんも分からねえ。俺が思うにゃ，お偉い裁判官どもは体面を取り繕うためなら，あんな代物はすっかりつぶしにかかるだろうよ。それに，そんなものがなんの役に立つって言うんだ。なんの役にも立ちゃしねえ。俺たちみてえな者が通りかかった時に，薄目を開けて見るくれえが関の山ってとこだ。

マルティーン・クルム　へえ！　俺ならそんなことさえやらねえな。俺の親父と爺さんは縄に吊されて死んじまった。何をこれ以上望むことなんかあるって言うんだ。俺は親父とお袋のことを恥だなんて思ってねえ。

ミッヒェル・シュティッヒ　でもな，真っ正直なご仁たちのほうではてめえのことを恥だとお思いだろうよ。親ごさんに正真正銘のせがれと思ってもれえるほど多くの場数を，てめえはまだまだ踏んじゃいねえんだからな。

マルティーン・クルム　へえ！　だから俺がうちの旦那には手加減してやりたがってるんだなんて，おめえは一体思ってるのか。それによ，あの忌々しいよそ者があんな儲け話を俺たちの口から引ったくっていったからには，奴にも必ず仕返ししてやりてえんだ。ちゃんと奴がご自分の時計とお別れする羽目にしてやるぜ，そん時になりゃ—ハハ！　見ろ，ほら，奴がすぐに来るぜ。とっとと失せろ！　俺様が名人の手際ってのを拝ませてやるからよ。

ミッヒェル・シュティッヒ　でもよ，山分けだ！　山分けだぜ！

第二場

マルティーン・クルム，旅人

マルティーン・クルム　俺様はすっとぼけた真似をしてやろう。精励に精励を重ねてお仕えしております，旦那様――手前はマルティーン・クルムと申しまして，こちらの本領内で執事を歴として仰せつかった者なんでございます。

旅人　ありえることだね，君。ところで，供の者を見かけなかったかい。

マルティーン・クルム　かしこまりました。はい，お見かけしました。それにしましても，光栄至極にも手前は，閣下の尊敬すべきお人柄につきましてとても多くの素晴らしい噂を耳に致しました。従いまして，光栄にもあなた様とお近づきになる栄誉を授かることは手前の喜びとするところでございます。旅の途上，うちの主人を昨晩とても剣呑な危ない目から救い出して下さった，と伺っております。今はただもう，旦那様のご幸運を喜んでおりますように，手前が喜びと致しますのは――

旅人　君が望んでいることを言い当ててみよう。私がご主人に加勢したことで，お礼を申したいのだと――

マルティーン・クルム　ええ，全くその通りです，まさしくそのことなんです。

旅人　君は正直な男だな――

マルティーン・クルム　それこそが手前なんです。それに，正直にやるのがいつも一番うまく行くやり方でもございますからね。

旅人　あんなささやかな親切を施して，これほど正直なご仁たちに感謝してもらったとは，私にとって少なからぬ喜びだ。君が示してくれる感謝の念は，こちらがして差し上げたことに対して，身に余るご褒美だよ。誰の心にもある人間愛のお陰で，私はそうせざるをえなかったのだ。あれは私の義務だったし，義務以外の何ものでもないと思われたにせよ，満足する他はないところだ。君たちはあまりにも人が良くて，愛すべきご仁であるからといって，あんなことで感謝するには及ばないよ。それは，こちらが同じような危険な目に遭っていたら，疑いもなく，全く同じように懸命になって君たちが見せてくれたはずのものだからね。私が君たちのお役に立てるところは，その他にどこかあるかな，君。

マルティーン・クルム　いえ！　旦那様，ご尽力を頂いてお心を苦しめたくはございません。必要とあらば世話を焼いてくれるに違いない下僕がおりますからね。ところで――できますことなら充分に承知しておきたいんですが，ことの成り行きはどんな具合だったんでしょう。一体どこだったんでしょう。

大勢の悪党でしたか。奴らはうちの気のいい旦那様からまさかお命を奪う気だったんでしょうか，それとも，金だけを巻き上げる気だったんでしょうか。やはり恐らくは，お命を奪われるくらいなら金を巻き上げられるほうがよかったんでしょうが。

旅人　あまり言葉を費やさずに，ことの成り行き全体を聞かせてあげよう。盗賊どもが谷合いの道でご主人を襲ったのは，ここから一時間ほどのところかも知れないな。私が旅していたのが丁度この道で，助けを求めるご主人の怯えた叫び声に動かされて，供の者ともども急ぎ馬で駆けつけた次第だ。

マルティーン・クルム　いやはや！

旅人　見ると，ご主人は無蓋の馬車の中におられた——

マルティーン・クルム　いやはや！

旅人　変装した奴がふたり——

マルティーン・クルム　変装した奴ら，ですと。いやはや！

旅人　その通り，早くもご主人に襲いかかっていた。

マルティーン・クルム　いやはや！

旅人　奴らはご主人のお命を奪おうとしたのか，それとも，縛り上げるだけにしてから，その分危なげなく金を巻き上げる気だったのかは，分からない。

マルティーン・クルム　いやはや！　ええ，もちろん，奴らは主人のお命を奪う気だったんでしょうとも。神をも恐れぬ奴らだ！

旅人　そいつは必ずしも言い張る気はないよ。奴らがやってもいないことを，恐れるあまりこちらがなすりつけることになるからね。

マルティーン・クルム　ええ，そうですとも。これだけは信じて頂きたいんですが，奴らは主人のお命を奪う気だったんです。手前には分かっております，しかと分かっております——

旅人　どうして君にそんなことが分かるはずがあるのか。だが，それでよしとしよう。盗賊どもは私を目にするとたちまち，獲物を見捨てて近くの茂みに力の限り逃げ出したのだ。私はその中のひとりに狙いをつけて短筒をお見舞いした。だが，辺りは既に暗過ぎたし，奴も遠くに離れ過ぎていたため，命中させたかのどうか，今でも決めかねているのだよ。

マルティーン・クルム　ええ，命中しませんでしたね——

旅人　君に分かるのか。

マルティーン・クルム　ただなんとなくそう申し上げているんです。なにしろ，

もう真っ暗でしたから。それに闇夜では，うまく狙いをつける真似なんかできっこないはずだ，って思いますから。

旅人　私もそう思う。ご主人が私にどれほど感謝の意を表して下さったか，言葉では言い表せないよ。私はご主人から幾度となく，救い出して下さったお方と呼ばれ，一緒に領地に戻ってくれるように，と無理やり言われたのだ。事情が許すなら，もっと長くこの愛すべきご仁の側にいたいのだが，今日のうちにまた出立しなくてはならない――だからこそ供の者を捜しているのだよ。

マルティーン・クルム　いえ！　どうか手前はそんなに長々とお手間を取らせませんから。もう少しだけご勘弁願います。ええ，更にお訊きしたかったことは一体なんでしたっけ。盗賊どもは――どうかおっしゃって下さい――一体どんな風体だったんでしょう。一体どんな恰好でしたんでしょう。変装しておった，と。でも，どんな風に。

旅人　あれはユダヤ人どもだったのだ，とご主人は断固として主張したがっておられる。奴らは髭をつけていた。そいつは本当だが，話し振りはここら辺りの歴とした農民の言葉だった。私が確信している通り，変装していたとすれば，奴らには黄昏れ時がもってこいだったのだ。というのも，ユダヤ人のせいで往来がどんな物騒なことになりかねないか，などということは，わけが分からないからだよ。なにしろ，お情けでこの国に居させてもらえるユダヤ人はこの通りほとんどいないのだからね。

マルティーン・クルム　ええ，ええ，ええ！　そいつは手前も全く確信しております。あれがユダヤ人どもだった，ってことを。あなた様は神をも恐れぬあのならず者をまだそれほどご存じないかも知れません。奴らのいる限り，一っ匹の例外もなく，詐欺師，泥棒，それに追い剥ぎなんです。だから神様に呪われた連中でもあるんです。王様の真似をするわけには参りませんが，手前なら一っ匹も，一っ匹たりとも生かしてはおかないところですよ。ああ！神よ，こんな連中から真っ正直なキリスト教徒を皆お守り下さい。神様ご自身奴らを憎んでおられないなら，どうして一体，つい先頃のブレスラウの惨事の折りに，キリスト教徒の倍近くのユダヤ人が命を落としてしまったんでしょうか。かたじけなくもこんなことを思い出しましたのも，うちの司祭様がして下さったこの前の説教のお陰でございます。早速そんなことで気のいい主人に仕返しをしようとしたなんて，まるで奴らは耳を澄ませていたみた

いですよ。ああ，旦那様，この世でご幸運とお恵みを授かりたいとお思いなら，ペストにも増してユダヤ人どもにはよくよくご用心下さい。

旅人　これが暴徒の吐く物言いに過ぎないのであれば，どれほどよかろう！

マルティーン・クルム　旦那様，例えば，手前は見本市に参ったことがございます。ええ，見本市のことを思い出すと，早速あの忌々しいユダヤ人ども皆に一気呵成に毒を盛ってやりたくなりますよ。奴らが人混みに紛れてひとり目，ふたり目，三人目と目をつけてくすねたのは，鼻をかむハンカチやら煙草入れやら時計やら，その他手前にはもはや分からないものなんです。盗むとなると，奴らは素早い，馬鹿みたいに素早しっこい。パイプオルガンを演奏する学校の先生など決して叶わないくらいの手際の良さです。例えば，旦那様，まず最初に奴らは押し合いへし合いしながら誰かひとりに近づくんですな。大体今手前があなた様にしておりますみたいに——

旅人　もう少しだけ礼儀は弁えてくれ，君——

マルティーン・クルム　いえ！　どうかお目に掛けることをお許し下さい。あなた様が今こうして立っておられると——いいですかい——稲妻みたいに奴らは時計用の内ポケットに手を伸ばすんです。（時計に手を伸ばす代わりに，上着のポケットにサッと手を突っ込んで，旅人の煙草入れを取り出す）でも奴らは今じゃこんなことならなんでもこの通り巧みにやってのけますので，誓って申し上げますが，そちらへ素早く動く時には，手がサッと伸びてゆくんですな。奴らは煙草入れのことを話に出す時は，きっと時計を狙っておりますし，時計のことを話に出す時は，きっと煙草入れを盗むことを目論んでおりますよ。（実に油断なく時計に手を伸ばそうとするが，取り押さえられる）

旅人　早まるな！　落ち着け！　君の手はこんなところで何を探る必要があるのだ。

マルティーン・クルム　これでお分かりのはずですよ，旦那様。手前がなんと下手糞なスリなんだろうってことが。ユダヤ人ならこんなドジを踏んだとしても，こんな上物の時計はきっと一巻の終わりだったでしょうよ——ですが，ご厄介をお掛けしていると分かりましたので，勝手ながらお暇させて頂きます。で，手紙の結びみたいな口上を申し上げるなら，一生涯，閣下がお示し下さったご好意に甘えて，この上もなく敬愛する旦那様に謹んでお仕えする者，気高き当騎士領の執事を歴として仰せつかった者たるマルティーン・ク

ルムより，てなところでございますよ。

旅人　さあ，行け，行くのだ。

マルティーン・クルム　ユダヤ人どもについて申し上げたことを，思い出して下さいよ。ユダヤ人ってのは，混じりっけなしに神をも恐れぬ泥棒連中なんですからな。

第三場

旅人

旅人　ひょっとするとあいつは，本物の阿呆なのか，それともとぼけた真似をしているのか，これまでユダヤ人の中にいたのよりも大した詐欺師かもなの知れない。ユダヤ人が騙すとしても，キリスト教徒にそれを無理やり押しつけたとは考えられない。キリスト教徒の中で，ユダヤ人相手に誠実な態度を取っていると自慢できる者などいるのか，怪しいものだ。ユダヤ人がすることと言えば，しっぺ返しをしようとするくらいが関の山だ。ふたつの民族を誠実につきあわせたいのであれば，双方がそれに見合った貢献をする他はない。けれど，他方を迫害することが，一方の場合宗教の問題であり，勲功にも値する働きであると言ってよいとすれば，どうなのか。だが――

第四場

旅人，クリストフ

旅人　お前にいてもらいたい時に，いつだって半時はまず探す羽目になるとはな。

クリストフ　ご冗談を，旦那様。そうじゃございませんか，手前がひとつとこ以上に同時にいるはずがございませんでしょう。してみると，あなた様がすぐにこの場所にお越しにならないことは手前の咎なんでしょうか。手前のいるとこなら，きっといつなりと手前の姿がお分かりのはず。

旅人　そうなのかい。で，まさか千鳥足なのか。お前がそんな目端の利いたことを言うわけが，今分かったぞ。お前はなんだって早くも朝から酔っぱらう羽目に。

クリストフ　酔っぱらってるなどとおっしゃいますが，呑み始めてないのも同様なんです。上等の地酒が二，三本，蒸留酒が二，三杯なんです。堅焼きパンは別として，正直者の身に誓って，手前は少しも頂いてはおりません。まだ全くの素面なんでございますよ。

旅人　いや，そいつはお前の顔を見ると分かるさ。それに友としてお前に忠告するが，食事を二人前に増やすことだな。

クリストフ　素晴らしいご忠告で！　手前のお務めからして，ご命令と受け取るのに吝かじゃございません。手前は行って参ります。それにご忠告をどれほどうまく活かす気でおりますことか，ご覧頂きたいもんです。

旅人　神妙にすることだ！　その償いに，お前は行って，馬に鞍を置いて荷物を積むのだ。私はこの午前のうちにも出立したいのだから。

クリストフ　朝餉を二人前食べろ，なんて冗談交じりにご忠告されたからには，あなた様が今真面目なお話をなさってると，どうして思うことなんてできましょう。思うんですが，今日は手前をからかうおつもりなんで。まさか，あの若いお嬢様のお陰でこれほどご陽気とは。ええ，この上もなく愛らしい子でございますね！――もう少しだけ，ほんのちょっとだけ年嵩でいてくれるほうがいいんですが。そうじゃございませんか，旦那様。お嬢様がそれ相応の熟れ頃になっておられない以上――

旅人　行って，命じたことをやるのだ。

クリストフ　本気におなりだ。とはいえやっぱり，三度目のご命令をお下しになるまで，待つとしましょう。問題はあまりにも重大でございますよ。お急ぎになり過ぎたきらいがございますね。それに旦那様にあれこれお考え頂く暇を差し上げるのは，いつだって慣れっこになりましたから。とくとお考え下さい，掌に乗せられんばかりのもてなしを受けてる当地をこんなに早くまたお発ちとは。昨日参ったばかりなんですから。当地のご主人のために計り知れない功績を立てたっていうのに，辛うじて夕餉と朝餉のもてなしを受けただけなんですよ。

旅人　お前の無遠慮振りは鼻持ちならない。人のお役に立つと決めた以上，これ以上面倒をお掛けしないことに慣れて欲しいものだな。

クリストフ　結構です，旦那様。お説教をお始めだ。ってことは，お怒りなんですね。お怒りをお鎮めなさって下さい。手前はもう行って参りますから——

旅人　じっくりものを考える習慣がお前にはほとんどないに違いない。こちらのご主人に披瀝したことと引き替えに，私たちがほんの僅かでもお礼の印を期待しているなどと思わせたなら，たちまち善行という名に値しなくなる。私は無理やりご主人に付き添ってこちらに参ることすらしないほうが良かったのだ。なんの目論見もなく見知らぬご仁に加勢した喜びは，果てしなく大きいものだ。それにご主人自身は，身に余るお礼の言葉を今おっしゃって下さるが，それ以上の恵みを後から差し上げたいと望まれたのだろう。委曲を尽くしてそれに伴う費用を出すことで感謝の意を表す恩義に駆られるご仁は，お返しをして下さるけれど，そのお返しというのは，私たちにとって自らの善行が重荷となる以上に，ご当人にとって厄介なものになるのだな。大概の人間は気分を損ねるあまり，恩人のいることがこの上もなく厄介になる，というわけだ。恩人が目の前にいると，自分の誇りが貶められるように思われるのだよ——

クリストフ　あなた様の哲学ってものは，旦那様，ご自分の息の根を止めますよ。結構です。あなた様と全く同じくらい太っ腹なところをご覧に入れましょう。手前は行って参ります。八半時もすれば馬に跨れるようにしておきますよ。

第五場

旅人，令嬢

旅人　あいつのお仲間になった試しはないが，あいつのほうでお仲間扱いにしている。

令嬢　なぜあたしどもをお見捨てになるの，お客様。どうしてこちらにそのように独りっきりで。うちにおられる僅かな時間のうちに，あたしどもとおつきあいなさるのがもうお嫌になってしまわれたの。残念なこと，と申し上げたほうがよろしいかも。あたしは世間の皆様に気に入って頂くよう努めてお

りましてよ。そして他のどなたよりもあなたに嫌われたくございませんの。

旅人　お許し下さい，お嬢さん。準備万端出立できるよう，供の者に命じたいと思っただけなのです。

令嬢　なんのお話ですの。ご出立ですって。一体いつお見えになったのかしら。既に一年逗留されて，心塞ぐような時にそんな思いをなされるなら，まだしも許されるかも知れません。でも，どうしてかしら。まる一日ご辛抱しようともなさらないの。あんまりですわ。申し上げますが，もう一度そんなお考えをなされたら，怒りましてよ。

旅人　これ以上心苦しい脅しは願い下げにして頂きたいのですが。

令嬢　そうですの。本気だと。あたしが怒れば，心苦しくおなりですって，本当なのかしら。

旅人　愛らしいお嬢さんのお怒りにどうして無関心なままでいられましょうか。

令嬢　あなた様のお言葉は確かに，おからかいも同然のように聞こえますが，本気だと受け取ることに致しましょう，あたしの思い違いであるとしても。だとすれば，お客様――世間の噂によると，あたしは少しは愛らしい，とのことなのですね。もう一度申し上げますが，今のうちに，この新たな年のうちにご出立のことをまたお考えになられたら，恐ろしく，恐ろしいほどに怒りましてよ。

旅人　期限を決めて頂くとは，とてもお情け深い。してみると，冬のさなかに追い出されるおつもりなのかな。しかも一番厄介なお天気の頃に――

令嬢　まあ！　誰がそんなことを申しております。その折りには礼儀を弁えてご出立のことをあるいはお考えになることもできると，申し上げているに過ぎません。だからといって，ご出立して頂くつもりはございませんわ。あたしどもがかねてよりお願いしたいと思っておりますのは――

旅人　もしかしたらそれも礼儀を弁えた上でのことで。

令嬢　あら，これは驚きですわ！　これほど正直顔のお方がからかうこともおできになるとは，信じられませんわ――まあ，ほら，お父様が参ります。行かなくては。あたしがお側におりましたことは，おっしゃらないでね。お前は殿方のお側におりたがる，などと実にたびたび咎め立てを致しますものですから。

第六場

男爵，旅人

男爵　娘がお側におりませなんだか。どうして一体あのお転婆は走っておるんですかな。

旅人　あんなに気立てが良くて快活なお嬢さんがおありとは，計り知れないほどお幸せなことですね。この上もなく愛らしい無邪気さに溢れた，わざとらしさなど欠片もない機知に溢れたお話し振りで，人に魔法をお掛けになるのですから。

男爵　あんたのご判断は娘の身に余るというもんです。娘は同じ年頃の娘たちと交わりを持った試しがほとんどのうて，人に好かれる術も持ち合わせてはおりませんのじゃ。この術というのは，田舎で身につけるには難しいくせに，美しさそのものがこれっぽちしかできん以上の幅を利かせることがたびたびなんですな。娘の場合は何もかもがまだ，手つかずの自然のままなんじゃよ。

旅人　それにこれは，都会ではお目にかかれないだけに，いっそう愛すべきものです。都会では何もかもが上辺を装っており，わざとらしくて，後から身につけるものになっておりますから。それどころか都会におりますと，無知と不作法とありのままの自然が，同じ価値を持つ言葉だと見做されるところまで，事態は既に来てしまっていますよ。

男爵　わしらの考えや判断がこれほど見事に一致しておるのを目の当たりにすることほど，心地よいことがあるじゃろうか。そいつは，わしの考えや判断が間違っておらんことの紛れもない証拠じゃと思いまする。ああ，とうの昔にあんたのような友がおらなんだとは！

旅人　他のご友人方に対して不公平となりますよ。私がよりにもよってその罪もない種となっておりましたら，申しわけございません。

男爵　他の友人たちに対して，とおっしゃるのかな。わしは五〇の齢を重ねておりまする――知り合いは持ったことはあるんじゃが，友というのはまだ持った試しがありませんのじゃ。それにあんたとの友情を求めておるこの僅かな時間以来，友情というのがこれほど魅力的なものと思ったことは一度たりともありませんのじゃ。なんによってわしはご友情にふさわしい者となることができるんじゃろうか。

旅人　私の友情は大したものではありませんので，これを得たいと望まれるだけでも，友情を持ち続けるだけの甲斐があるというものです。あなたの願いは，ご自分で願っているもの以上の価値がおありです。

男爵　じゃが，お客人，恩人のご友情というもんは――

旅人　恐縮ですが――友情ではないのです。私のことをそのような間違った形でご覧になるのであれば，あなたの友であることなどできません。ほんの一瞬でもあなたの恩人であるとするなら，あなたのご友情は積極的な感謝のお気持ちに過ぎないのだと，危惧を抱く必要はないのでしょうか。

男爵　両方を結びつけるな，とおっしゃるんじゃな。

旅人　とても難しいのです。感謝の念を自らの義務であると思うのは，気高い心の持ち主ですし，友情に必要なのは，魂が嘘偽りなく融通無碍に活動することなのです。

男爵　じゃが，わしにどうせよと――お好みが細やか過ぎて，わしの頭はすっかり混乱しておりまする――

旅人　当然のこと以上に私を買い被らないで下さい。精々のところ私は，義務を喜んで果たした人間に過ぎません。義務それ自体は感謝の念に値しないのです。ですが，義務を喜んで果たしたことのお返しとして，あなたのご友情で充分に報いられておりますから。

男爵　そのような寛大なお心に，わしの頭はかえって混乱の度を増しておりまする――じゃが，ひょっとして向こう見ずに過ぎるのかも知れんが――お名前もご身分も厚かましくお訊きする気にはまだならんかったのじゃ――ひょっとしてわしが差し出しておる友情のお相手は――これを軽んじておられるとでも――

旅人　申しわけございません。あなたは――あなたはご自分を――あなたは私のことをあまりに買い被っておられるのです。

男爵　（傍白）訊いてよいもんかの。このお方はわしの好奇心に気を悪くしかねんぞ。

旅人　（傍白）訊かれたら，なんと答えようか。

男爵　（傍白）訊かんと，不作法と取られる恐れがあるんじゃ。

旅人　（傍白）本当のことを言えばよいのか。

男爵　（傍白）やはり一番安全な道を取りたいの。まずはこの方のお供から存分に訊き出させることにしたいもんじゃ。

旅人　（傍白）どうかこの混乱から解放されるとよいのだが――

男爵　どうしてそんなに思いに沈んでおられるんじゃ。

旅人　私も同じことをお訊きするつもりでした，ご主人――

男爵　我を忘れることが時としてある，というのは弁えておりまする。何か別のお話をしましょうぞ――わしを襲ったのが本物のユダヤ人どもであったことは，お気づきですかな。ほんの今しがたうちの村長が話してくれたんじゃが，数日前に奴ら三人に街道で出くわしたそうじゃ。村長の話では，奴らは正直者というより，いかにもならず者の風体だったそうじゃ。それに，どうしてまたそのことを疑ってよいもんかの。金儲けにあれほどご執心の連中は，正当にそれとも不当に手に入れるのか，策略を巡らすのかそれとも暴力に訴えるのかなど，ほとんど気に掛けてはおらんのじゃ――奴らは商売の駆け引きに，あるいははっきり申せば，詐欺にもお誂え向きのようじゃ。礼儀正しゅうて，自由闊達で，進取の気性に富んでおって，口が堅い，というのが，奴らを尊敬すべきものとしておる特徴なんじゃが，それも，これらの特徴を発揮し過ぎてわしらの不幸を招かん限りのことですな――（少し間をおく）――ユダヤ人どものせいで，わしは他にも既に少なからぬ損害や不愉快な思いを被ったことがあるんじゃ。まだ兵役を勤めておった頃，わしの知り合いのひとりに代わって手形に連署して欲しいと説得されましての。そして振り出し相手のユダヤ人のせいで，わしは換金するのみならず，二倍も支払わなきゃならん事態に陥ったんじゃ――ああ！　全く底意地の悪い卑劣極まる連中じゃ――どうお思いかの。すっかり悄然としたご様子じゃが。

旅人　何を申せとおっしゃるのですか。このような苦情は何度も耳にしたことがあります，と申し上げる他はございません――

男爵　それに，奴らの顔つきには反感を抱かせるものが一様にありはしませんかの。陰険，疚しさ，私利私欲，詐欺に偽証などいうもんが，奴らの目から嫌でもはっきり読み取れると思えるんじゃが――じゃが，どうしてわしから目を背けられるのかの。

旅人　お話を伺っておりますと，ご主人，あなたは人相学（フユズィオグノミー）の大家でおられる。それに気懸かりなのは，私の人相が――

男爵　いや！　あんたのお言葉は心外ですぞ。どうしてそんなお疑いを抱かれるのじゃ。人相学の玄人でのうても，あんたのお顔ほど誠実で，寛大で，ご親切なのを一度たりとも拝見したことがないと申し上げる他はございません

な。

旅人　本当のことを打ち明けますと，私は全ての民族について世間の誰しもが下す判断に与する者ではないのです――私の失礼な振る舞いに気を悪くなさらないで下さい――全ての民族の中には良い魂の持ち主もいれば悪い魂の持ち主もいるはずだと思われるのですが。そしてユダヤ人の中にも――

第七場

令嬢，旅人，男爵

令嬢　あら，お父様――

男爵　まあ，まあ，大したお転婆じゃ，見事なお転婆振りじゃな。さっきお前はわしの前を走っておったな。あれはどういう意味だというんじゃ――

令嬢　お父様，あたしが逃げ出したのは，お父様からじゃなくて，ただお父様のお咎めからなのよ。

男爵　その違いはとても微妙じゃな。じゃが，わしの咎めを受けるに値するもんとは，一体なんだったんじゃ。

令嬢　まあ，お父様はきっとご存じなんでしょう。ご覧でしたのね。あたしはこちらの方のお側におりました――

男爵　はて，さて。で――

令嬢　で，このお方は殿方で，殿方とはあまり関わりを持つな，とお父様はお命じなさったのよ――

男爵　いや，このお方は別じゃと，お前には自ずから気づいて欲しかったの。お前のことを好いて下されば，願ったり叶ったりなんじゃが――お前が絶えずこの方のお側におったって，わしは喜んで見ておろうぞ。

令嬢　ああ――そんなことは多分最初にして最後だったのでしょう。お供が既に馬の背に荷を積んでいるわ――それに，これこそ申し上げたいことなのよ。

男爵　なんじゃと。誰が。お供が，じゃと。

旅人　ええ，ご主人，私が命じたのです。仕事を片づけねばなりませんし，ご厄介をお掛けするのも気懸かりですし――

男爵　そんなことについては長々と考えさせんで下され。感謝の念を心に抱く

者があんたのお陰でその恩義に報いる気になったことをもっと間近にお示しする幸せを捨てろ，とでもおっしゃるのかの。いや，お願いじゃ，これまでのご好意にもうひとつ付け加えて下され。これは，わしの命を保つのと全く同じくらい掛け替えのないものとなるじゃろう。しばらくの間――せめて数日の間はご逗留下され。わしの力が及ぶというのに，あんたのような殿方にお名前も伺わず，敬意も表さず，お礼も差し上げんままにご出立させておったなら，いついつまでも自責の念に駆られる羽目になったところじゃろうて。身内の者を何人か今日という日を期して招待させたのは，わしの喜びを分け合うてもらうためじゃし，わしの守護天使たるあんたとお近づきになる幸せを分け与えるためなんじゃから――

旅人　ですが，私が是非ともしなければならないことは――

令嬢　そこにじっとしていて，お客様，立ち去らないで。元通り荷を降ろすよう，お供に，ひとっ走り言って参ります。でも，ほら，もう来ましたわ。

第八場

クリストフ（長靴を履き，拍車を付け，鞍用の鞄をふたつ両脇に抱えてている），**前場の人々**

クリストフ　さあ！　旦那様，準備は万端でございます。ご出立を！　お別れの文句はいささか手短にお願い致しますよ。逗留が叶わないっていうのに，色々お喋りしてなんのお役に立ちましょうや。

男爵　一体何が妨げとなって，こちらに逗留できんのじゃ。

クリストフ　ある思いのせいなんです，男爵様。これは，うちの旦那の頑固さが基になってるもんでして，寛大さにかこつけてるもんなんですよ。

旅人　うちの供の者は時折り頭が変になるのです。この者をお許し下さい。あなたのお願いは実際お愛想以上のもの，と分かりました。不躾になることを恐れるあまり，かえって不躾な真似をすることがないように，仰せのままに致しましょう。

男爵　おお，どれほど感謝の念を捧げなくてはならんことでしょうな。

旅人　さあ，行って，元通り荷を降ろしてくれ！　明日になってから出立しよ

う。

令嬢　さあ，聞こえないのかしら。何を一体立ちつくしているの。行って，元通り荷を降ろすのよ。

クリストフ　本来なら，腹を立ててもいいとこなんですが。まるで手前の怒りが目を覚まそうとしてると言ってもいいくらいなんですが，そんなことをしても，こちらに逗留して，呑み食いにありついて，手厚いもてなしを受ける以上のひどい事態にはならないんですから，よしとしましょう。さもないと，無駄骨を折らされるのは願い下げですよ――ご承知ですかい。

旅人　黙っているのだ！　恥知らずが過ぎるぞ。

クリストフ　本当のことを申し上げてるからですよ。

令嬢　まあ，うちにご逗留下さるなんて，素晴らしいわ。さあ，もう一度この通り仲良く致しましょう。いらして――うちのお庭をご案内したいの。気に入って下さることでしょう。

旅人　あなたの気に入っておられるなら，お嬢さん，もう間違いなしも同然ですね。

令嬢　さあ，いらして――その間にお食事の時間となりますわ。お父様，お許し下さいますでしょうね。

男爵　それどころか，お前たちに付き添って行くつもりじゃよ――

令嬢　いえ，いえ。そんなことを期待するつもりはございませんことよ。なすべきことがおありでしょうから。

男爵　お客様を楽しませて差し上げる以上の大事なことは，今ないんじゃよ。

令嬢　お客様は気を悪くされることはないでしょう。ねえ，お客様。（そっと彼に向かって）ええ，とおっしゃってね――あたし，できますことならあなた様とふたりっきりで歩きたいのです。

旅人　ほんの少しでもお邪魔をしていると分かれば，これほど軽々しくこちらに逗留する気になったことを，たちまち後悔することでしょう。では，どうか――

男爵　おお，どうして子供の話などお気に留められるのじゃ。

令嬢　子供，ですって――お父様――そんな恥ずかしい思いはさせないで下さいね――あたしがどれほどのねんねなのか，とこのお方はお思いになるでしょうから――いい加減に止めましょう。あたしは，ご一緒に散歩できるだけの年頃なんですの――いらして――でも，ちょっとご覧になって――お供がま

だ立ちつくして，鞍用の鞄を両脇に抱えているわ――

クリストフ　こんなものは，苦労してる身にしか関わりがないと，思うんですがね。

旅人　黙っているのだ！　お前は身に余る敬意を表されているのだぞ――

第九場

リゼッテ，前場の人々

男爵　（リゼッテが来るのを目にしながら）お客人，娘に付き添って庭に行かれるのがお嫌でないんなら，わしは後からすぐに追いかけて参りましょうぞ。

令嬢　いえ，お父様，お好きなだけ長くいらして下さいな。あたしたちはいっそのこと退屈しのぎを致しましょう。いらして――（令嬢と旅人は退場する）

男爵　リゼッテ，お前に話すことがあるんじゃ――

リゼッテ　どうなさいました。

男爵　（そっと彼女に向かって）うちのお客がどなたなんか，まだ分かってはおらんのじゃ。ある理由があってお訊きすることもしたくないんじゃ。お前ならあの方のお供から――

リゼッテ　旦那様が望んでおられることは，承知しております。こんな思いが致しますのも自ずから好奇心に駆られたせいなんです。そのためにあたしはこちらに参ったのですから――

男爵　では，骨を折ってみておくれ――そしてこの件について知らせておくれ。お礼の褒美を取らせるぞ。

リゼッテ　さあ，お行きなさいませ。

クリストフ　では，旦那様，手前どもにとってお宅の居心地がよいからと申しまして，お気を悪くなさらんで下さい。でも，どうか，手前のために面倒な思いはなさらんで下さい。目の前にあるものだけで御の字でございますから。

男爵　リゼッテ，この者の監督をお前に任せよう。何ひとつ不自由のないようにしてやるんじゃぞ。（退場する）

クリストフ　それじゃ，お姐さん，何ひとつ不自由のないようにして下さるご親切な監督閣下，ごきげんよう。（退場しようとする）

第十場

リゼッテ，クリストフ

リゼッテ　（彼を引き止める）　いやよ，お客さん，こんな礼儀知らずな真似を許しておくなんて，忍びないわ――あたしには一体，ちょっとだけでももてなし甲斐のある女っ気というものが足りないのかしら。

クリストフ　知ったことじゃないよ。ことをいい加減にしないんだね，お姐さん。女っ気が足りてるのか，あり余ってるのかなんて，言えやしないよ。なるほど，お姐さんのお喋りな口から察すると，後のほうだと強く言ってもいいくらいだ。せめて今のとこはお暇させておくれよ――ご覧の通り，両手両腕が塞がってるんだ――腹が空いたり喉が渇いたら，すぐに参上するから。

リゼッテ　そんなことなら，うちの馬具方でもやるわ。

クリストフ　なんてこった！　そいつは利口な男に違いない。俺みたいにやるとはね。

リゼッテ　お知り合いになりたいんなら，そいつは裏の離れの前で鎖につながれて寝そべってるわよ。

クリストフ　まさか！　冗談じゃないよ。犬のことなんだな。してみると，なるほど，からだの空腹と喉の渇きのことは分かってくれたんだろうと，ピンと来るけど，俺が承知したのは，そんなものじゃなくて，愛の飢えと渇きのほうなんだ。これだ，お姐さん，こいつなんだよ。俺がこうして打ち明けて，今は満足かい。

リゼッテ　打ち明けてくれた言葉よりはましね。

クリストフ　いやはや！　ここだけの話なんだが――ひょっとしてそれと一緒に，俺の愛の申し出が嫌じゃない，ってくらいのことは，お姐さんも言ってくれるかい。

リゼッテ　もしかしたらね！　申し出をなさりたいと。本気ってことなの。

クリストフ　もしかしたらね！

リゼッテ　ふん，なんてお返事なの！　もしかしたらね，なんて！

クリストフ　だって，俺の返事はお姐さんのと髪の毛一本の違いもなかったぜ。

リゼッテ　でも，あたしの口に上れば，返事の意味ってのは全然別物になるのよ。もしかしたらね，っていうのは，女が一番請け合う返事なの。なぜって，この手の勝負はどんなに不利であっても，手の内を見せ合っては決していけないからよ。

クリストフ　なるほど，それじゃ，俺たちの取り引きは全く一変するな――これで本題に入った，と思うんだが――（鞍用鞄をふたつとも地面に投げつける）どうしてこれほど骨が折れるのか，分からない。ほら，見つかったぞ！俺はあんたが好きなんだ，お姐さん――

リゼッテ　これこそ，言葉少なくして意味多しと言うとこね。この意味ってのを解きほぐしてみましょうよ――

クリストフ　いや，むしろそのままにしておこう。だけど，落ち着いてお互い考えを打ち明けられるように――どうか，腰を下ろして――立ってると疲れてくるんだ――面倒な真似はご免だぜ――（無理やり彼女を鞍用鞄に座らせる）――俺はあんたが好きなんだ，お姐さん――

リゼッテ　でも――座り心地がやけに硬いわ――なんてこと，中にご本が入ってるわ――

クリストフ　おまけに，なかなか感傷的なものや滑稽なものもね――それでも座り心地が硬いってかい。うちの旦那の旅行用文庫なんだ。中身は，お涙頂戴の喜劇や，お笑いぐさの悲劇だったり，感傷たっぷりの英雄叙事詩や，陰気臭い酒宴の歌だったり，果ては，新品の七つ道具だったり，という具合さ――さあ，いいから，取り替えっこしよう。俺のにお掛けよ――面倒な真似はご免だぜ――俺のは実に柔らいぞ。

リゼッテ　ご勘弁を――あたしはそんなに不作法じゃないつもりよ。

クリストフ　面倒な真似はご免だぜ――ご挨拶は抜きにして――その気がないと――それじゃ，抱き上げていこう――

リゼッテ　あんたがお命じなさるからには――（立ち上がって，もうひとつのに腰掛けようとする）

クリストフ　命じる，だと。とんでもない――いや，命じるってことには，色んな意味があるんだよ――そんな風に思いたいんなら，ずっと座ったまま売れ残ってるがいいさ――（再び自分の鞍用鞄に腰掛ける）

リゼッテ　（傍白）厚かましい奴ね！　でもこれでよしとする他ないわ――

クリストフ　話は一体どこで止まってたのかな――そうだ――愛の話だ――俺

はあんたがこの通り好きなんだ，お姐さん。フランス侯爵の奥方相手なら，「ジュ・ヴ・ゼーム（Je vous aime　お慕い申しております）」って言うとこだろうぜ。

リゼッテ　なんてことを！　あんた，それどころかフランス人とでも——

クリストフ　いや，恥を打ち明ける他ないけど，俺は一介のドイツ人に過ぎないよ——でも，幸運なことに，色んなフランス人とつきあうことができたんだ。そんなわけで，正直者に欠かせないことなら，この通り結構習ったんだ。俺の顔を見れば，そいつもすぐに分かると思うよ。

リゼッテ　それじゃ，ひょっとしてご主人のお供でフランスからやって来た，とでも。

クリストフ　とんでもない——

リゼッテ　どこかよそからなの。もちろん，多分——

クリストフ　俺たちが出立したとこは，フランスをまだ数マイル後にしたとこさ。

リゼッテ　まさかイタリアから，って言うんじゃないでしょうね。

クリストフ　そこから遠くはないよ——

リゼッテ　それじゃ，イングランドから——

クリストフ　と言っていいね。イングランドはそこの州のひとつなんだ。俺たちはここから五〇マイル以上も離れたとこに住んでる——こりゃ，大変だ——馬たちが——可哀相な奴らがまだ鞍をつけたまま立ってる。申しわけない，お姐さん——急いで立ち上がるんだ——（鞍用鞄を再び脇に抱える）——愛に身を焦がしてるとはいえ——行って，まずは一番必要なことを片づけなくっちゃ——まだまる一日と，こいつが一番大事なことなんだが，まだまる一夜が控えてる。きっとそのうちひとつになりたいもんだ。——大丈夫，なんとかしてあんたと再会するさ。

第十一場

マルティーン・クルム，リゼッテ

リゼッテ　あの人から訊き出せることはほとんどないでしょう。間抜け過ぎる

のか，それとも頭が良過ぎるのか，どっちかだわ。どっちにしても，しっぽを掴ませないのよ。

マルティーン・クルム　そうかい。リゼッテのお姐さん。あいつも大した奴だ！俺を蹴落とすとはな。

リゼッテ　あの人には，蹴落とす必要なんかなかったのよ。

マルティーン・クルム　そうかい。必要なんかなかった，だと。どんなにしっかりと俺があんたの心に食い込んでるのかなんて，誰にも分かりはしねえと思うよ。

リゼッテ　そいつは，執事さん，あんたがそう思うからよ。あんたみたいな連中は，無粋な考えをする権利があるにはあるわ。だからあたしも腹を立ててるのは，あんたがそう考えたからじゃなくて，あたしに向かってそんな口をきいたからなのよ。あたしの心があんたとなんの関わりがあるのか，知りたいとこね。どんな親切心を出して，どんな贈り物をしてあんたは一体そんな権利を手に入れたのかしら――今じゃ，そんなに漫然と心を売り渡す人なんてもういないわよ。で，まさか，あたしが自分の心をそれほど持て余してるなんて思ってるの。汚らしい豚どもの前に心を投げ出すくらいなら，きっとそのうちお誂え向きの正直な男を見つけるつもりだわ。

マルティーン・クルム　なんてこった！　お陰様で，鼻風邪を引いたみたいにご機嫌を損ねっちまったぞ！　ご機嫌を直すにゃ，煙草をひとつまみ嗅がねえと――ひょっとして，くしゃみをすりゃ元通りなくなってくれるかも知れんな――（掠め取った煙草入れを引っ張り出して，しばらく両手の中で弄んだ挙げ句，滑稽なほど高慢ちきな態度でひとつまみ嗅ぐ）

リゼッテ　（彼を横合いから見つめる）忌々しいわ，こいつは煙草入れをどこから手に入れたのかしら。

マルティーン・クルム　ひとつまみどうでえ。

リゼッテ　まあ，謹んで頂くわ，執事さん――（彼女は嗅ぐ）

マルティーン・クルム　銀の煙草入れにできねえことなんか，ありゃしねえ！――疳の虫に前より融通を利かしてくれねえかい。

リゼッテ　銀の煙草入れなのかしら。

マルティーン・クルム　銀のでなけりゃ，　マルティーン・クルム様は持ってねえだろうよ。

リゼッテ　よくよく拝んでも構わないかしら。

マルティーン・クルム　いいとも，だがな，俺の両手の中でだけだぜ——

リゼッテ　造りは見事ね——

マルティーン・クルム　その通り，たっぷり五ロート（一ロートは約十六グラム）は重さがあるんだぜ——

リゼッテ　造りだけでも，こんな小箱が欲しくなるわ——

マルティーン・クルム　溶かしても，あんたのお役に立つよ——

リゼッテ　ご親切様なこと——間違いなく贈り物なのかしら。

マルティーン・クルム　そうとも——びた一文も掛かってねえぜ。

リゼッテ　本当の話，こんな贈り物なら，女の目をすっかり眩ませることだってできるかも！　こいつを使えば運を開くことができるわ，執事さん。少なくともあたしなら，銀の小箱をダシにして言い寄られたら，身を守ることなんて到底できっこないでしょうよ。こんな小箱があれば，あたしは恋人の言いなり，ってとこね。

マルティーン・クルム　そいつは分かる，分かるぜ——

リゼッテ　この通りお金が掛かってないんだから，ご忠告したいんだけど，執事さん，これを贈って仲のいい女友達をお作りになったら——

マルティーン・クルム　そいつは分かる，分かるぜ——

リゼッテ　（媚びながら）あたしに贈って下さるのよね——

マルティーン・クルム　いや！　ご勘弁を——今じゃ，そんなに漫然と銀の小箱を手放す者なんかもういねえからな。で，一体，リゼッテのお姐さん，俺が自分の小箱をそれほど持て余してる，って思ってるのかい。汚らしい豚どもの前に小箱を投げ出すくれえなら，きっとそのうちお誂え向きの正直な男を見つけるつもりだよ。

リゼッテ　こんなに人を馬鹿にした無礼なことって見たことがないわ——人の心を嗅ぎ煙草入れ同然に見積もるなんて。

マルティーン・クルム　その通り，石みたいな冷てえ心は嗅ぎ煙草入れ同然に——

リゼッテ　石みたいに冷たくするなんて，ひょっとしたらないかも知れないわよ，もしも——あたしがどんなにお喋りしたところで無駄だけど——あんたはあたしの愛を受ける値打ちがないわ——あたしはなんて気のいいお馬鹿なんだろう——（今にも泣きそうになる）執事さんがいまだに，口に出して言うことと心に思うことが同じ正直者のひとりだなんて，もう少しで信じると

こだったわ——

マルティーン・クルム　で，俺もなんて気のいいお馬鹿なんだろう，女が口に出して言うことと心に思うことが同じだ，って信じるとはな——ほら，リゼットちゃん，泣くのはなしだぜ——（彼女に小箱を渡す）——けど，これで，俺はあんたの愛を受ける値打ちがあるんだろうな——手始めに望むのは，きれいなお手々にちょこっと接吻するだけさ——（彼は手に接吻する）ああ，こいつはなんともうめえ味だ——

第十二場

令嬢，リゼッテ，マルティーン・クルム

令嬢　（そこに忍び足でやって来て，執事の手に頭を押しつける）ねえ！　執事さん——あたしの手にも接吻しておくれ。

リゼッテ　おやまあ，そんなことは——

マルティーン・クルム　大喜びで，お嬢様——（彼女の手に接吻しようとする）

令嬢　（彼の横っ面を張る）礼儀知らずね，冗談だってことが一体分からないの。

マルティーン・クルム　冗談は願い下げにして下せえよ——

リゼッテ　ハハハ！（彼を笑い飛ばす）まあ，お気の毒様，執事さん——ハハハ！

マルティーン・クルム　そういうことなんだな，おまけに笑ってやがる。こいつがお返しってわけか。もう結構，もう結構だよ——（退場する）

リゼッテ　ハハハ！

第十三場

リゼッテ，令嬢

令嬢　だって，この目で見ていなかったら，思いもしなかったところよ。お前

は接吻を許すの。おまけに執事なんかから。

リゼッテ　全くあたしも知ったことじゃありませんけれど，どういったわけで盗み聞きなさるんですの。お庭をあのお客様とご一緒に散歩なさっておられるもの，と思ってるんですけど――

令嬢　ええ，お父様があとから来なければ，まだあの方のお側にいるところだわ。でもあんな調子じゃ，ちゃんとした言葉なんか交わせないわ。お父様は全く真面目過ぎて――

リゼッテ　まあ，ちゃんとした言葉って，一体なんのことをおっしゃってるんですの。あの方とお話しなくちゃいけないことって，一体なんですの，しかもお父様の耳に入れてはいけないことって。

令嬢　色んなことよ――でも，これ以上訊いたら，怒るわよ。とにかく，あたしはあのお客様にご好意を寄せているの。これくらいは打ち明けても構わないかしら。

リゼッテ　お父様がお嬢様にいつかこのようなお婿様をお世話なされたら，さぞ顔を背けたくなるほどひどく食ってかかられるんでしょうね。で，真面目な話，お父様がどうなさるかは，誰にも分かりません。ただ残念なのは，お嬢様がもう何歳かお年を召しておられない，ってことです。ひょっとしたらすぐにでも実現の運びとなるかも知れませんけど。

令嬢　いえ，年齢だけが大切なら，お父様のお力で何歳か増やして頂けるわ。お父様にはきっと口答えしないつもりよ。

リゼッテ　いいえ，もっといい手を存じております。あたしの年を何歳か差し上げましょう。そうすれば，ふたりとも救われますわ。そうなれば，あたしは老け過ぎじゃなくなりますし，お嬢様も若過ぎる，ってことはありませんし。

令嬢　それも本当ね，こいつはいいわね。

リゼッテ　ほら，お客様のお供が参ります。あの者と話をしなくては。全てはお嬢様のためなんです――あの者とふたりっきりにして下さい――お行きなさって。

令嬢　でも，忘れないでね，年のことを――聞いてるの，リゼッテ。

第十四場

リゼッテ，クリストフ

リゼッテ　お客さん，もう戻ってくるなんて，さぞかし，お腹が空いてるか，喉が渇いてるのか，なのね。

クリストフ　もちろんさ――でも，俺が飢えと渇きのことをどんな風に打ち明けたのか，よく覚えておいておくれよ。実を言うと，お姐さん，昨日馬から下りたとたん，もうあんたに目をつけてたのさ。でもね，数刻だけここに逗留するものと，勘違いしてたせいで，あんたと知り合っても，骨折り損だって，思ってたのさ。こんな短い間にどんな首尾を収めることができったって言うんだい。恋のお話をお終いから始める羽目になったとこだよ。けど，猫のしっぽをとっ掴まえて暖炉から引っ張り出すってことも，あんまり確実な話とは言えないね。

リゼッテ　そいつは本当ね。でも今度は大丈夫，前よりもきちんとしたやり方ができるわ。そちらは結婚の申し出ができるし，あたしはそれにお応えできる。あたしはそちらに疑いを抱くことができるし，そちらはそれを晴らすことができる。あたしたちがこれから踏み出すひと足ひと足ごとにじっくり考えることができるし，猫を袋に入れたまま売りつけるみたいに，お味を試さないで売りつけ合っては駄目よ。昨日すぐに恋の申し出をしてもらえたら，なるほど受け入れたとこでしょう。でも，ちょっと考えてもみてよ，時間を掛けて，そちらのご身分や財産，お国やお役目のことなんかを，少しもお訊きしなかったら，あたしがどんなにか大胆なことをしてしまうとこだったか，をね。

クリストフ　そんなこと知るもんか！　でも，そいつもそれほど必要だった，って言うのかい。そんな回りくどいことが。結婚する時には，これ以上手数を掛けないでくれるよね――

リゼッテ　おやまあ，狙いが身も蓋もない結婚だけって言うんじゃ，あたしがこの通り誠実にやろうとしても，滑稽なとこだわね。でも，愛ってものを分かり合うんなら，事情は全く別よ。こんな場合は，一番単純で些細なことが肝心要になるの。だから，こちらの好奇心を何もかも満たしてくれないんなら，ほんのちょっとでも親切にしてもらおうだなんて，思わないことね。

クリストフ　どうしたんだい。その好奇心ってのは，一体どこまで広がるもん

なんだい。

リゼッテ　だって，お供を判断するには，ご主人を見れば一番よく分かるんだから，あたしがとりわけ知りたいのは――

クリストフ　うちの旦那がどなたか，ってことかい。ハハ！　こいつはお笑いぐさだ。あんたが訊いてることは，そちらのほうがわけ知りだと思えたら，俺自身があんたに訊きたいことなんだ――

リゼッテ　まあ，そんな古臭い月並みな手口でごまかせるとでも思ってるの。要するに，ご主人がどなたなのか，承知しておかなくちゃならないの。さもないと，ふたりの仲もまるっきりお終いよ。

クリストフ　うちの旦那と知り合ってから，四週間にしかならないんだ。ハンブルクで雇って下さってから，そのくらいだよ。そこからお供をしてきたんだが，ご身分やお名前をお訊きしようと骨を折ったことは一度もないね。これだけは確かなんだが，お金持ちに違いない。なにしろ，俺もご自分も道中金に困る目に遭ったことはないからね。で，何をこれ以上気に掛ける必要があるって言うんだい。

リゼッテ　まあ！　口の堅いあたしにそんな些細なことさえ打ち明ようとはしてくれないんだから，そちらの愛に何を期待しろって言うのかしら。あたしは今後一切打ち明けないつもりよ。例えば，ここにきれいな銀の嗅ぎ煙草入れがあるんだけど――

クリストフ　そうかい。どうしたんだい――

リゼッテ　ほんのちょっとだけなら頼まれてあげてもいいわ，誰からもらったものなのか，言ってあげるわよ――

クリストフ　いや，今じゃそいつは俺にはそんなに大事なものってわけじゃないね。誰が一体そちらさんからもらうのか，そっちのほうを知りたいもんだな。

リゼッテ　その点については本当のとこまだ何も決めてないわ。でも，万が一そちらが手に入れないと，他でもないあんた自身がその責めを負う羽目になるのよ。そちらが誠実さを見せてくれたら，きっと報いてあげるつもりよ。

クリストフ　っていうよりむしろ，俺がお喋りしてくれたら，って言うんだね。でも，正直者たる俺に誓って，この度口を閉じてるのは，やむを得ずなんだ。なにしろ，お喋りできることなんて，少しも知らないからね。とんでもない！　いやしくも隠し事があるんなら，大喜びでぶちまけたいとこなんだが。

リゼッテ　さよなら（アディユー）。そちらの美徳ってのををこれ以上長々と苦しめたくないの。ただあたしが望むのは，美徳のお助けを借りて，まもなく銀の小箱と最愛の娘を手に入れられますように，ってことよ。でも，その美徳とやらのせいで今そちらはどちらも奪い取られてしまったんだわ。（行こうとする）

クリストフ　どこへ，どこへだい。落ち着いておくれよ！（傍白）嘘をつく他はないな。だって，こんな贈り物を取り逃がすつもりなのか。それに，嘘をついてどんな大事になるっていうんだ。

リゼッテ　どうしたの，もっと詳しいことを教えてくれる気があるの。でも――もう分かったわ，そちらには苦しいことなのね。いえ，いえ。何も知りたくないわ。

クリストフ　ああ，いいとも，なんでも教えてあげるよ――（傍白）大嘘のつける奴がいればなあ！――まあ，聞きなよ――うちの旦那は――貴族のおひとりなんだ。やって来られたのは――俺たちが一緒にやって来たのは――オランダ――から――なんだ。旦那は――ある厄介ごとのせいで――ちょっとしたことなんだが――人を殺したせいで――逃げ出す羽目になったんだ――

リゼッテ　なんですって。人を殺したせいで，ですって。

クリストフ　うん――でも，名誉を賭けた人殺しのせいで――決闘をしたせいで逃げ出す羽目になったんだ。そして今まさに――旦那は逃亡の身なんだ――

リゼッテ　で，そちらは，お客さん――

クリストフ　俺もお供をして逃亡の身さ。殺された奴に加勢する連中が激しく追っ手を差し向けたんだ。この通り，追っ手を掛けられてるせいで――これで，他のことは容易に察しがつくはずだよ――なんてことだ，どうしたらいいんだ。自分でもよく考えて見ておくれよ，なんにでも鼻を突っ込みたがる若い奴が俺たちを侮辱した。旦那が剣で一気に突き刺した。他にどうしようもなかった――誰かに侮辱されたら，俺もそうするさ――あるいは――そうでなきゃ横っ面を張ってやるよ。正直な奴なら，何事もそのままにしておいてはいけないんだ。

リゼッテ　そいつはご立派ね！　そういう人たちには好意を抱くわね。なにしろ，あたしも少しばかり我慢ができない質だから。でも，ちょっとご覧なさい，ほら，そちらのご主人が来られるわ。果たしてご主人を目にしただけで，そんなに怒りっぽい，そんなに冷酷なお方だなんて分かるのかしら。

クリストフ　いや，おいで！　俺たちは旦那を避けて行こう。俺をご覧になると，秘密を漏らしたと，お分かりになるかも知れないからね。

リゼッテ　あたしはそれで満足よ――

クリストフ　でも銀の小箱は――

リゼッテ　さあ，いらっしゃい。（傍白）あたし自身の秘密を打ち明けた代わりに，うちのご主人からどんなご褒美を頂けるのか，まずは知っておきたいわ。相当なものなら，小箱はこちらに差し上げましょう――

第十五場

旅人

旅人　小箱が見当たらない。ちょっとしたものだが，なくしたのは痛手だ。私からあれをよもや執事が――だが私がなくしたのかも知れない――軽はずみにも外に引っ張り出してしまったのかも知れない――疑いまで掛けて，人を侮辱するものではない――とはいえ――あいつは私にからだを押しつけてきた――時計に手を伸ばした――あいつを取り押さえた。あいつも取り押さえられずに，小箱に手を伸ばしたはずはない，のだが。

第十六場

マルティーン・クルム，旅人

マルティーン・クルム　（旅人に気づくと，元来た道に引き返そうとする）ひぇっー！

旅人　まあ，まあ，もっと近くに，君！――（傍白）こちらの考えが分かっているみたいに，こいつはやっぱりおどおどしているぞ――どうした。さあ，もっと近くに。

マルティーン・クルム　（反抗的に）ああ！　暇がねえんだよ！　俺様相手にお喋りしたがってるってことは，先刻ご承知さ。もっと大事なことをしなくちゃならねえんだ。貴様の英雄気取りの真似事なんか十っ遍も聞きたくねえ。

まだ知らねえ奴に聞かせることだな。

旅人　何を聞くかと思えば。先ほど執事は健気で礼儀を弁えていたが，今は恥知らずで不作法だな。どっちが一体君の本当の仮面なんだ。

マルティーン・クルム　うへっ！　そいつは禿鷹に教え込まれたんだな，俺様の顔を仮面だなんて悪態をつくとは。貴様と喧嘩はしたくねえ――さもねえと――（立ち去ろうとする）

旅人　こいつの恥知らずな振る舞いはこちらの疑いを強めるばかりだ。いや，いや，我慢だ！　君には是非とも訊いておかねばならないことがあるのだ――

マルティーン・クルム　是非ともって言われても，こちとらにはそいつを答える義理はねえよ。だから，訊くのは止めとくんだな。

旅人　敢えてお伺いしたいね――しかし，お門違いのことをすると，どれほど腹立たしいことになるのやら――君，私の小箱を見かけなかったかい――見当たらないんだ――

マルティーン・クルム　そいつはなんて訊きようだ。そいつが盗まれたってのが，なんか俺様のせえなのか――俺様をなんだと思ってるんだ。故買屋だと，それとも盗っ人だとでも。

旅人　誰が一体盗みの話などしているんだ。君自身，お里が知れると言っていいぞ――

マルティーン・クルム　お里が知れる，だと。それじゃ，俺様が持ってるって言うんだな。そいつが何を意味するのかも，承知なのか，正直者がその責めを受けてるっていうのに。分かってるやがるのか。

旅人　どうしてそんな大きな声を出さなくてはいけないんだ。まだ君のせいだと言ったわけじゃない。君が自分自身を訴えているんだ。それに，自分が大きな間違いを犯すことになるかどうか，私が知らないわけがあるだろうか。先ほど私の時計に手を伸ばそうとした時，私に取り押さえられたのは，一体誰だったのだ。

マルティーン・クルム　いやあ！　全く冗談の分からねえご仁だ。いいですかい！――（傍白）小箱がリゼッテのところにあるのをこいつが目にしてさえいなければ――あの娘っ子はやっぱり馬鹿じゃねえだろうし，あれを見せびらかしたりはしねえだろうな――

旅人　いや，あれが冗談だったのはよく分かっている。だから，君が私の小箱

のことも冗談の種にしたがっているのだ，とは思う。しかし冗談も度を過ごすと，最後には本気に化けるぞ。君がご立派なお名前を失うのは惜しい。君に悪気はなかったのだ，と確信が持てれば，他の人たちだって——

マルティーン・クルム　ああ，他の奴ら——他の奴らだと——他の奴らなら，こんな非難がましいことを言われりゃ，とっくの昔に嫌気がさしてらあ。だが，俺様があれを持ってると思うんなら，からだを探ってみることだな——からだを改めてみるんだな——

旅人　そんなことをすれば，笑止千万と思われるだろう。それに見つからないからと言って，ほとんどなんの証拠にもならないだろう。

マルティーン・クルム　俺様は持ってねえ，ってくらいの証拠にはなるだろうよ。俺様が正直者もんだと分かってもらうために，ズボンのポケットを自ら裏返してやろう——気をつけて見るんだな——（傍白）あれが転がり出るなんてことがありゃ，ただじゃ済まねえぞ。

旅人　いや，ご足労には及ばないよ——

マルティーン・クルム　いや，いや。見せたいね，見てもらいたいね。（ポケットのひとつを裏返す）ここに小箱があるってのか。パンくずなら中にあるぞ。大切な代物だ！（別のポケットを裏返す）ここにもなんもねえぞ。この通り——いや，違った——ちっぽけな暦が一部あらあ——これを取ってあるのは，月から月へと引き継がれる詩が載ってるからよ。その詩ってのが全く申し分ないんだ——まあ，けど先へ進もう。気をつけて見るんだな。ほら，三つ目を裏返してやろう。（裏返すと，大きな髭が二本落ちてくる）こん畜生！俺はなんてもんを落とすんだ。（素早く拾い上げようとするが，旅人のほうが素早くて，そのうちの一本をひっつかむ）

旅人　これになんの役を演じさせるのだい。

マルティーン・クルム　（傍白）くそっ，忌々しい！　こんな代物はとうの昔にお払い箱にした，と思うんだが。

旅人　こいつはまさか，髭じゃないか。（髭を顎の前に当てる）この通りユダヤ人も同然に見えるかい——

マルティーン・クルム　ああ！　こっちに寄こすんだ！　寄こすんだよ！　またぞろ何を考え出すか，分かったもんじゃねえな。うちの幼いガキどもを時々それで怖がらせてやるんだ。そのためにあるんだよ。

旅人　済まないが，私に預けておいてくれ。私もこれをつけて怖がらせてやろ

う。

マルティーン・クルム　ああ，俺様をからかわねえでくれ。取り返さなくちゃならん。（髭を旅人の手から引ったくろうとする）

旅人　行くのだ，さもないと――

マルティーン・クルム　（傍白）こん畜生，さあ，大工が開けた抜け穴みたいなうめえ逃げ道を見つけ出したいもんだ――もう結構だ，もう結構だよ。分かったぞ，貴様がここにやって来たのは，俺様を不幸な目に遭わせるためなんだ。けど，嘘をつくんなら，悪魔に掠われたっていいくれえ，俺様は正直者なんだ！　俺様の悪口を言いふらせる奴がいるんなら，お目に掛かりてえもんだ。覚えておくんだな！　どんな事態が襲い掛かろうたって，俺様は髭を悪用した覚えなんかねえ，って誓って言えるぞ――（退場）

第十七場

旅人

旅人　あの男自らが，極めて不利な疑いを私に抱かせている――あいつが変装した盗賊どものひとりでなかったはずがあろうか――だが，当て推量でものを言う場合は慎重に行きたいものだ。

第十八場

男爵，旅人

旅人　昨日ユダヤ人の辻強盗と格闘になって，その中のひとりから髭をむしり取ったのだ，と信じては頂けませんか。（男爵に髭を見せる）

男爵　それについてのご理解はどんな風ですかの，お客人――じゃが，どうしてあんなに早々とわしを庭に置き去りにされたんかの。

旅人　ご無礼はお許し下さい。すぐにまたお伺いするつもりだったのです。小箱を探すために，失礼しただけなのですが，この辺りでなくしたのに違いあ

りません。

男爵　そいつは甚だ心苦しいことじゃて。うちにお迎えしてまで，ご損な目にお遭わせするとは。

旅人　損害はそれほど大きくはないでしょう――ですが，是非ともまあ，この立派な髭をご覧下さい。

男爵　既に一度見せて下さった。どうしてかの。

旅人　もっとはっきりと打ち明けましょう。私が思いますには――いや，駄目です，当て推量は差し控えましょう――

男爵　当て推量じゃとな。打ち明けて下され。

旅人　いいえ。急ぎ過ぎました。思い違いなのかも知れませんから――

男爵　お陰で落ち着きませぬ。

旅人　お宅の執事のことはどうお思いです。

男爵　いや，いや，お話を逸らせることは止めにしましょうぞ――当方に示して下さったご親切に賭けて懇願致すのじゃが，思っておること，推量しておること，思い違いしておったかも知れんことを，打ち明けて下され。

旅人　こちらの問いに答えて頂きさえすれば，打ち明けて差し上げる気にもなるというものです。

男爵　うちの執事のことをどう思っておるか，じゃな――実に正直で誠実な男と思っておりまする。

旅人　さようでしたら，こちらに申し分がございましたことは，お忘れ下さい。

男爵　髭が一本――当て推量――執事――こんなものをどうやって結びつけろ，とおっしゃるんじゃ――こちらの願いは何ひとつお聞き届け頂けないもんなのかの――思い違いをしておったかも知れん，とな。思い違いをしておってたんなら，友の住まいでどんな危険な目に遭われるとおっしゃるんじゃ。

旅人　あまりに強く問い詰められますから，申し上げますが，執事がこの髭を不用意にも取り落としてしまったのです。もう一本持っておりましたが，素早く元通りしまい込んだのです。執事の話し振りから察すると，自分のすることなすことが人から悪事だと思われると信じ込む人間だということが露見しました。それ以外にもまた，あまり正直ではない――少なくともあまり利口とは言えない手管を弄する現場を取り押さえたのです。

男爵　不意に目が開かれた思いが致しますな。懸念なんじゃが――お客人の思い違いではなかったんじゃろうて。それでいて，このような打ち明け話をな

さるのを躊躇っておられた，とな。即刻参って，真相を探り出すために，あらゆる手を打ちましょうぞ。わしを殺そうとした者を我が家に置いておる，などということがあってよいものか。

旅人　ですが，万が一私の推測が幸いにも間違いだとお分かりになっても，お恨みにならないで下さい。あなたが私の口を割らせたのです。さもなければ，永遠に口を黙していたところでしょう。

男爵　お客人の推測なさることが真実であれ，偽りであれ，打ち明けて下さったこと，いついつまでも感謝申し上げましょうぞ。

第十九場

旅人，（そしてその後から）**クリストフ**

旅人　あのお方があいつに早まった態度を取らなければ，いいのだが――なにしろ，疑いがどれほど濃厚だとしても，恐らくはまだ無実かも知れないからな――実に気懸かりだ――実際のところ，配下に対する嫌疑をあの通り主人に掛けさせるのは，ただごとではない。無実だと分かったところで，主人は配下への信頼を永久になくしてしまう――確かに，よくよく考えれば，口を黙しておいたほうが良かったのだ――自分がなくしたくせにあいつのせいにしたのだ，と聞かされれば，私利私欲に駆られ仕返しをしたいがために，疑いを掛けたのだと思われはしないだろうか――その通り――取り調べを元通り止めさせることができるのなら，なんであろうと，ことの責任を引き受けたいのだが――

クリストフ　（笑いながらやって来る）ハハハ！　ご自分がどなたなのかご存じなんで，旦那様。

旅人　自分が道化なのを承知しているのか。何を訊くかと思えば。

クリストフ　結構です，ご存じないんですから，手前が申し上げましょう。あなた様は貴族のおひとりなんです。オランダからお越しになった。あちらでご不快な目に遭われた，決闘のせいでね。運よく，小生意気な若造を剣で刺し殺しておしまいになった。殺された者に加担する仲間が激しく追っ手を掛けました。あなた様は逃亡の身となられた。で，手前は光栄にも，逃亡のお

供をさせて頂いてるってわけです。

旅人　お前は夢を見ているのか，それとも血迷っているのか。

クリストフ　そのどっちでもございませんよ。なにせ，血迷ってるにしちゃあ，手前のお喋りは目端が利き過ぎておりますし，夢を見てるにしちゃあ，羽目を外し過ぎですからね。

旅人　誰がお前にそんな下らぬことを信じ込ませたのだ。

クリストフ　いえ，手前に信じ込ませるなんて，問題外でございますよ。ですが，本当にうまく練られたもんだ，とお思いになりませんか。嘘をつく間がじっくりないのに，これ以上うまいことを思いつくなんて，きっとできなかったでしょう。そんなわけですから，少なくともこれ以上，好奇の目を向けられる恐れはございませんよ。

旅人　だが，そのような事態全てをどう受け取ってよいものやら。

クリストフ　お気に召すもの以上は，必要ございませんよ。他のことは，手前にお任せ下さい。ことの成り行きがどうなったのか，まあ聞き下さい。手前はあなた様のお名前，ご身分，お国，お役目のことを訊かれたんです。長々と頼まれたわけじゃありませんが，それについて知ってることはなんでも言ってやりました。つまり，手前は何も知らない，と言ってやったのです。こんなご報告ではとても不充分で，これでは満足する謂われが到底ない，と容易く思って頂けることでしょう。それで更に問い詰められたんです。ですが，無駄なこってしたよ。手前はずっと口を閉ざしておりました。なぜって，隠し立てしなきゃならんことは何ひとつなかったんですからね。でも挙げ句の果てに，贈り物を差し上げるわ，って言われて，知ってる以上のことを言う羽目になっちまったんで。つまりは，嘘をついたんで。

旅人　見下げ果てた奴め，思うに，汚れた利益に乗せられて，父なる祖国を裏切ったようだな。

クリストフ　だって，ふとした弾みで本当のことを偽る羽目になったなんて，これぽっちも信じたくないじゃございませんか。

旅人　恥知らずの嘘つきめ，お前のお陰で，頭が混乱してしまった。この混乱から——

クリストフ　そこからなら，すぐにも切り抜けられますよ。手前に今おっしゃりたいと思っておられた，おきれいに飾り立てる言葉をもっと詳しく教えて下さりゃ，すぐにもね。

旅人　だがそうなると，私は素性を明かす羽目にならないだろうか。

クリストフ　いっそう結構なことですよ。そうなりゃ，手前も折りを見てあなた様とお近づきになるってもんです。ですが，まさか心に疚しいとこがないのに，手前がこんな嘘のために気に病んでよいもんなのか，一度ご自身で判断下さいませんか。（小箱を引っ張り出す）この小箱をご覧下さい。これほど容易く手に入れることができたとは。

旅人　私に見せてみろ。（小箱を手に取る）何を目にしていることか――

クリストフ　ハハハ！　さぞびっくりなさるだろうって思いましたよ。そうじゃございませんか，これほどの小箱が手に入るんであれば，ちょっとした法律なんぞご自分でごまかしになるんでしょうな。

旅人　してみると，お前が私から掠め取ったのか。

クリストフ　えっ，なんですって。

旅人　私が腹立たしいのは，お前の不実さというよりは，その不実させいで，ある正直な男に負わせてしまった軽はずみな疑いのほうなのだ。それでいて，お前はいまだにこの通り血迷うほど厚かましく，小箱が――全く同じと言ってよいほどの恥ずべき手口で手に入れたにもかかわらず――贈り物だ，などと言いくるめたいのか。行くのだ！　二度と再び私の目の前に姿を現すな！

クリストフ　夢を見ておいでなんで，さもなきゃ――敬意をお払いして，もうひとつのほうはまだ口にせんでおきましょう。まさか，焼き餅を焼いて，そんな突飛な話を思いつかれたわけじゃございませんよね。小箱がご自分のものだとおっしゃるんで。失礼ながら，手前が盗んだものっておっしゃるんで。仮にそうであるんなら，他ならぬあなた様に向かってこいつをひけらかすなんて，手前は大馬鹿者に違いございませんよ――よかった，ほら，リゼッテがやって来ます――急いで来ておくれ！　どうか俺に手を貸して，旦那様を正気にお戻ししておくれ。

第二〇場

リゼッテ，旅人，クリストフ

リゼッテ　まあ，お客様，あたしどものところでなんという騒ぎを起こされる

んです！　一体うちの執事が何をした，と。あなた様のお陰で，主人は執事にすっかり逆上してしまわれました。お話に上っておりますのは，髭，小箱，略奪のことでございます。執事は泣いて，自分に罪はない，あなた様が嘘をつかれているんだ，などと悪態をついております。主人は一向に気が治まるどころか，今，執事を捕縛させるために，村長と裁判所の元に使いを出される始末です。一体全体これはどういうことなんでございましょう。

クリストフ　いや！　そんなことはまだなんでもないよ。まあ，聞いて，聞いておくれよ，旦那様が今，こともあろうに手前をどうなさるおつもりなのか，を——

旅人　そうだとも，リゼッテさん，私が軽はずみだった。執事に罪はない。ひとえに，神をも恐れぬ供の者のせいで，このような不快な目に遭わされてしまったのだ。小箱を掠め取ったのは，こいつなのに，執事にその疑いを掛けてしまった。それにもちろん，髭のことは，執事の言った通り，子供じみたいたずらだったのだろう。これから参って，善行を重ねることで，不快な目に遭わせたことを忘れさせたいと思うのです。

クリストフ　いえ，いえ，お留まりを。まずは手前に償いをして下さらんと。なんてこった，お願いだから黙ってないで，リゼッテ。ことの成り行きを話しておくれ。あんたが小箱ごと絞首台に掛けられるのを，願いたいくらいだよ。こんなことで俺を盗っ人にさせたいってのかい。あんたが小箱をくれたんじゃないか。

リゼッテ　その通りよ。あんたにあげたままにしておいてあげるわよ——

旅人　では，やはり本当なのですね。ですが，この小箱は私のものなのです——

リゼッテ　あなた様の，ですって。そいつは存じませんでしたわ。

旅人　してみると，小箱を見つけたのはリゼッテなのか。で，私の不注意が全ての混乱のせいだと。（クリストフに向かって）では，お前にもあまりに酷いことをしてしまったのか。済まない。これほど恥ずかしく軽はずみなことをしたとは，恥じ入る他ない。

リゼッテ　（傍白）なんてこと，これでほとんど呑み込めたわ。いえ，いえ！　このお方が軽はずみだったのではないわ！

旅人　おいで，私たちがしたいのは——

第二一場

男爵，旅人，リゼッテ，クリストフ

男爵　（慌ててこちらにやって来る）今すぐ，リゼッテ，お客人に小箱をお返しするんじゃ。何もかも明々白々じゃ。あいつが一切を白状したぞ。あんな奴から贈り物を受け取るなんて，お前は恥ずかしゅうはなかったのかの。どうした。小箱はどこにあるんじゃ。

旅人　では，やはり本当なのですね——

リゼッテ　お客様がとうの昔に取り返しておられます。旦那様がお世話を受けることのできる者からなら，あたしも贈り物を受け取って構わないわ，って思ったんです。あたしも旦那様と同様，あいつのことを知らなかったんです。

クリストフ　じゃあ，手前が贈ってもらったものはなし，ってわけだ！　悪銭身につかず，だな。

男爵　じゃが，最愛なる友よ，なんとお礼の気持ちを表せばよいものかの。わしを同じ大きな危ない目から救い出して下さるのは，これで二度目じゃ。あんたにはわしの一生を負っておりますぞ。断じてわしは，あんたがおらなければ，これほど身に迫った災厄に気づかんかったことじゃろうて。村長は，我が全領内で一番の正直者と思っておったんじゃが，神をも恐れぬ悪事の仲間じゃった。してみると，わしがこれまでにそんな危ない目に遭っておれば命を落としたのでは，とご懸念かな。今日拙宅をご出立されておったら——

旅人　本当ですね——そうしておりましたら，昨日させて頂いたつもりのお手助けも，とても中途半端なものに終わっていたところですよ。ですから，天が私をお選びになって，このように思いがけなくもことに気づかせて下さったとは，この上もない幸せと思っております。そして，先ほどは，思い違いをしているのではと，不安におののいておりましたが，今はこの通り嬉しいのです。

男爵　あんたの人間愛，あんたの寛大さには感心するばかりじゃな。ああ，リゼッテが知らせてくれたことが本当であれば，よいんじゃが！

第二二場

令嬢と前場の人々

リゼッテ　まあ，どうして本当ではない，なんておっしゃるのかしら。

男爵　おいで，娘や，おいで。お前の願いとわしの願いをひとまとめにしておくれ。わしを救ってくれたお方にくれぐれもお頼みするんじゃ，お前の婚姻の手を受け入れて下さるように，そしてお前の手からわしの財産を受け取って下さるように，とな。わしの感謝の気持ちとして，このお方に全く劣らずわしが愛しておるお前以上に，どんな掛け替えのないものをお客人にお贈りすることなぞできるじゃろうて。どうしてあんたにこのようなお申し入れができるのか，などと訝しく思わんで下され。あんたがどなたなのか，お供が打ち明けてくれたんじゃ。感謝の念を表すこの計り知れん喜びを恵んで下され。わしの財産はわしの身分に釣り合っておるし，わしの身分はあんたの身分に釣り合っておる。ここなら，あんたは敵どもに見つかる恐れはないし，ご友人たちと交われば，敬われもすることじゃろう。じゃが，落胆のご様子じゃな。どう考えたらよいのかの。

令嬢　あなた様はもしかしてあたしのことを気に掛けておられるのかしら。誓って申し上げますが，あたしはこれほどの喜びをもって父の申すことに従った試しは決してございませんの。

旅人　あなたの寛大さには驚かされます。申し出て下さったお返しの大きさから見れば，私の親切などどれほどちっぽけなものなのか，ようやく分かりました。けれど，なんとお答えすればよいのでしょう。供の者が嘘を申したのです。それに私は——

男爵　望むらくは，あんたが，あいつが嘘偽りを申したようなお方では決してありませんように！　後生じゃから，あんたのご身分がわしのより低いものであらんことを！　そうであれば，わしのお返しはもう少しましなものとなるし，あんたのほうでもひょっとして，わしの願いをお聞き届け下さることに吝かではないじゃろうし。

旅人　（傍白）どうして私も素性を明かさないのか——おお，あなたのために身命を捧げることができますなら！　この通り，あなたの徳にすっかり感じ入っております。ですが，お頼みをお聞き入れできないとしましても，それ

は運命のせいで，私のせいにはなさらないで下さい。私は——

男爵　ひょっとしてもう結婚していなさると。

旅人　いいえ——

男爵　どうなさった。なんじゃと。

旅人　私はユダヤ人なのです。

男爵　ユダヤ人，じゃと。酷い巡り合わせじゃ！

クリストフ　ユダヤ人，だと。

リゼッテ　ユダヤ人，ですって。

令嬢　それになんの差し障りがあるのかしら。そんなことに関わりなく，あなた様はあたしを迎えることが充分おできになるわ。

リゼッテ　まあ，お黙り下さって，お嬢様。どんな差し障りがあるのか，後でお話し申し上げたいと思いますから。

男爵　それじゃ，神ご自身が感謝の気持ちを邪魔なさる場合もあるというわけなんじゃな。

旅人　感謝なさりたいお気持ちだけで，充分なのです。

男爵　そんならせめて，運命が許す限りのことをさせてもらいたいものじゃ。わしの全財産をお贈りしまする。裕福にして恩知らずでおるくらいなら貧乏でも恩を知っておるほうがましじゃからな。

旅人　そのお申し出も徒労に終わりましょう。我が父祖たちの神が必要以上のものを私に与えてくれたからです。およそお返しとしてあなたにお願い申し上げたいのは，今後，我が兄弟たちについては，もう少し穏やかで，もう少し世間の偏見に囚われないご判断を下して頂きたい，ということだけなのです。我が宗教のことを恥ずかしく思っておりますので，私は隠し立てをしませんでした。そうなのです。あなたが私に好意をお寄せになりながら，我が民族に対しては反感を抱いておられたことが，分かりました。ですが，どんな人間であろうと，その人から交わされる友情は，私にとっていつも計り知れないほど貴重なものでした。

男爵　自分の振る舞いには恥じ入るばかりじゃて。

クリストフ　これでようやく，驚天動地から我に返ったぞ。なんですって。あなた様はユダヤ人でありながら，正直なキリスト教徒に世話をさせる勇気がおありだった，と。あなた様には，手前に仕えて頂きたかったとこですよ。聖書によると，そうあるのが当然といったとこなんです。いいや，手前を血

祭りに上げて，キリスト教徒全員を侮辱なさったんです。だから，旦那様が道中，どうして豚肉を召し上がろうとせず，その他次から次へとおかしな振る舞いをなさったのか，手前には分からなかったんだ。これ以上長々とお供をして差し上げるなどと，思わんで下さいよ。おまけに，訴えてやりたいくらいだ。

旅人　キリスト教を信じる他の暴徒よりましな考えをして欲しい，などとお前に期待することはできまい。お前をハンブルクでどんな惨めな境遇から救い出してやったのか，肝に銘じてもらおうと思ってはいないし，この先も私の元に留まって欲しいと強いる気もない。だが，お前の世話にはこの通りなかなか満足しているし，まして先ほどは根も葉もない疑いを掛けてしまったのだから，そのお返しに，リゼッテがお前に先ほど贈りたがっていたものを実際贈ろう。報酬もあとで支払いたい。それを受け取ったら，行きたいところへ行くがいい。（彼に小箱を渡す）

クリストフ　いえ，とんでもないこって！　ユダヤ人の方々ってのは寛大なんですね。あなた様はご立派なお方だ。よし，きた，お側から離れやしませんよ！　こんなお喋りに応えて，キリスト教を信じる主人ってのが銀の小箱を贈ってくれた試しなんぞありませんからね。手前はどうかしていたんでは。

男爵　あんたのなさることを拝見しておると，何もかもがわしをうっとりさせますな。おいで下され，罪人どもが無事拘置されるよう，手配を致しましょうぞ。ああ，ユダヤ人が皆あんたのようなお方であれば，どれほど尊敬の念に値することでしょうな！

旅人　そしてキリスト教徒が皆あなたほどのご気性を持っていれば，どれほど敬愛の念に値することでしょうか！

（男爵，令嬢および旅人，退場）

最終場

リゼッテ，クリストフ

リゼッテ　それじゃ，お客さん，さっきはあたしに嘘をついたの。

クリストフ　そうだよ，そうしたのは，ふたつのわけがあってのことなんだ。

第一に，本当のことを知らなかったんだからね。もうひとつには，返さなくちゃいけない小箱と引き替えに，本当のことをあんまり色々言うわけにはいかないからね。

リゼッテ　そんなご事情なら，あんたもまさかユダヤ人ってわけかしら。いくらしらばっくれていてもね。

クリストフ　そんなことを根掘り葉掘り訊くなんて，お姐さんにしちゃあんまりだぜ！　さあ，おいでよ。

（クリストフ，リゼッテと腕を組み，両人退場）

『ユダヤ人』終幕

附　記

ドイツ啓蒙主義を代表する劇作家にして批評家であるゴットホルト・エフライム・レッシング（Gotthold Ephraim Lessing: 1729-81）作の喜劇『ユダヤ人 Die Juden』（一幕全二三場 1749年）は，僅か二〇歳で書き上げられた初期の小品ではあるが，ユダヤ教・キリスト教・イスラム教を象徴する三つの指輪に擬して宗教上の寛容と普遍的な人間愛を説いた最晩年の著名な喜劇『賢者ナータン Nathan der Weise』（1779年）にも繋がる重要な戯曲のひとつであると見做してよいであろう。とはいえまずは，主役の旅人と男爵令嬢（ふたりとも固有名がない）がユダヤ人に対する世間の抜き難い偏見に抗して見せる凛とした姿勢以上に，旅人の従者クリストフや令嬢の侍女リゼッテ，また令嬢の父親である男爵など，ふたりに絡む他の脇役達が面白可笑しく繰り広げる軽妙な掛け合い漫才風の科白や，嗅ぎ煙草入れや付け髭などの小道具を発端とした齟齬・誤解を巡る演技を観客に素直に楽しませるのが，実作者レッシングの主な趣向のひとつではなかったのかと思われる。本作品は実際，登場人物達がそれほど生き生きと活写されている印象を残す佳作となっている。

本喜劇を今回翻訳するに際して，典拠・参考とした『レッシング全集』などの文献は下記の通りである。

1. G.E.Lessing: Werke und Briefe in 12 Bänden. Bibliothek deutscher Klassiker(BdK). Frankfurt am Main 1989. Bd.1. S.447-488.
2. G.E.Lessing: Lessings Werke in 3 Bänden. Insel Verlag. Frankfurt am Main 1967. Bd.1. S.133-166.
3. G.E.Lessing: Werke in 3 Bänden. Carl Hanser Verlag. München 1982. Bd.1. S.249-288.
4. Kindlers Literatur Lexikon im dtv in 14 Bänden. München 1986.

劇作品としての読み易さを図るために，下記の措置を施した。

１．翻訳の底本として『全集』(1.) を採用したが，ト書きの表記については，括弧を付している『選集』(2.) を採用し，ト書きと科白の違いを明確に区別できるように図った。

２．二種類の記号が用いられている傍線「－」および「－－」については，見た目の煩雑さを避けるため，二倍角の「――」に全て統一した。

なお，翻訳に際しては，先訳『ユダヤ人』（小宮曠三譯　『世界文學全集古典篇　レッシング篇』第二四巻所収　277-308頁　河出書房　昭和27年11月10日初版発行）を参考にさせて頂いた。この場をお借りして，厚く感謝の意を表する次第である。

〈キーワード：レッシング・演劇・ユダヤ人〉